

汚職と民主政治

自民党政調会財政部長となる直前の日本政治論。汚職の発生自体は嘆かわしいが、それが国民にわかるのが民主政体の良さと断じている。

汚職、社会革命、新興宗教

日々配達される新聞を見ると、政界や官界の汚職事件に対する記事や論説が目につかない日は珍しい。映画や演劇にもその節々を風刺するような演出が間々見られる。又そういう時弊に対する庶民のいかりをこめた抗議が日々のジャーナリズムには必ずと云つてよい程見受けられる。

政界や官界は泥沼のようにくさりきつているし、日本はこんなことでは先々どうなるのだという悲憤と危懼の念が、街の人々の頭に重つたるくたれこめていようだ。かかる事態や世相に対して一番重い責任をもつ政治が、権力の争奪と利害の対立に明け暮れし、そのやり口もまだまだ優柔不断で非能率であり国民の不信と軽蔑をかっている。それに又政界人はおおむね二流三流の俗物であつて、空

つばの頭脳と喧ましい論議と、野卑で横柄な振舞をさらけ出して警世の勇氣も、自省のたしなみも、革新の気魄も、一向に見られないようだ。これは正に世紀末世相であり、仏教に言う末世の時代であるまいかというような暗い慨嘆が、人々の胸奥に滞留しているかのようだ。

いやそれは世紀末でもなく末世でもない。これがあたり前の世の中さと割りきって、利を漁り、快楽を追う向も多い。又この世相は資本主義体制の必然の産物であって、社会主義革命こそ、これらの弊風を是正する唯一無二の道であるとして、資本主義を呪い、社会主義を憧れ、暴力を以つてもその革命をかちとろうとする人もある。更には現世の矛盾と腐敗から、新興の宗教に自らを逃避しようとする人々も少なくはない。

誰にも判る民主政体の良さ

しかし、私は、大胆にも、一応これでよいのだと断言するのだ。何故なれば、汚職や不正、権力争奪や利害対立の様相、政治の非能率と不信、そういつた一切のものが、とにもかくにも国民の凡てに判るようになってきているからだ。若しかかる時弊の一切が、国民にわからないようなことでもあれば、一体われわれはどうなるのであるうか。その時に現出される世相は、墓場のようなものであって、表向は立派でも、一皮むけば、中には腐肉が堆積されているのだ。眞実は姿を失い、虚偽と虚飾が世を蔽う始末になる。

一切が判るようになっていく政体、そしてそれを批判することができるようになっていく仕組、それをわれわれは民主主義政体として理解している。醜は醜、美は美、実は実、嘘は嘘と、終極におい

てそれがあらわになる政体、それが民主政治であるとわれわれは考えている。そして、そうであるが故に終始自らを戒め貪欲から遠ざからしめるようになっていく仕組み、パチルスが陽光の光熱に永く生存を許されないようになっていく仕組み、われわれはそれを民主政治だと理解している。

従って、汚職が汚職として追及され処断されること、そして人々がそれを以て自らを戒める資とすること、この事が何よりも大切なことであり、社会を清潔にする第一義諦である。

その第一義諦が、今の日本でも、かくも守られているのだ。

独裁者の天国は庶民には地獄

汚職に対する今日のジャーナリズムのとり上げ方が全部正しく且つよいというのではない。ジャーナリズムの自制と慎重さが先ず希求されるわけではあるが、しかし、ともかくこの第一義諦が生かされていくことは、何としてもわれわれの俸せなのだ。

『依らしむべし、知らしむべからず』『スターリンは過誤を犯すことができない』等という標語が、政治の要諦になり、民草に批判の自由もなければ抗議の手段もなく、報道の自由もなければ事実を知る方法もないような政体、それは独裁者にとっての天国であるかも知れないが、庶民にとっては地獄であると謂わなければならない。われわれは先ず、何よりも先に、日本が民主政体の列に連らなる国であることを悦び、その運営の改善に一層の工夫を重ねなければなるまい。この意味において私は楽道家であるのだ。

ある陣笠の独白

衆議院文教委員長になる直前の評論。「代議士は選良ではなく、一介の平凡な人間である」とか「法案の改廃に血道をあげている政治の在り方など本来排除されるべきものである」など、当選四回の中堅代議士の本音を述べている。

代議士はよく国民の「選良」だといわれる。私もそうありたいと思うが事實は必ずしもそうでないようだ。代議士はその文字の示す通り、代表であって選良とは言いきれないものがある。国会は選良の府ではなく国民全体の縮刷版のようなところで、そこにはたしかに選良たるにふさわしい人もいるが、必ずしもそうでない手合も相当いることは争えない。

代議士は選良ではない

ところが政治に関する勧告や論評の多くには、暗黙裡に代議士を選良だとする前提が潜んでいるようだ。そのためか概して政治の論調が政界や政治家に対して厳しすぎるようである。論者自身も心の中では政治家に大きい期待をもっていないのに、文字の上だけは恰も大きな期待を寄せているかのよ

うに、無闇に大声で鼓舞するか、あるいはその無能や非徳を責める論調に走っているものが多い。しかし政治家といえども一介の平凡な人間にすぎず、無闇に高度の倫理水準や学殖、公共心を求められても実はなりきれないのである。政治の前進をはかるためには政治評論というものに、もう少し歴史性と実践性をもって賣う必要があると思われる。

たとえば政党の派閥関係に対しても、世間は半ば嫌悪の情をもち、半ば嘲笑的に取扱っているが、人間の集団のあるところ、必ず何らかの派閥があるという冷厳な事実には案外目をおおっている。政界はおろか、実業界にも教育界や学問の世界にも、あるいは芸能や信教の世界にも、それぞれ抜き難い派閥はある。ひとり政界だけがその例外でなければならぬということ自体、本来無理な注文ではあるまいか。

そうはいうものの私とて政治がいつまでも低劣の境を低迷してよいとしているのでは決してない。むしろ私は政治の進歩に対し人に劣らない執着をもっているつもりだ。ただ現在の、現実の政治をめぐる進歩と反動の相引関係、その直接の担い手である政治家の教養や力量、その支持層の政治意識等々の制約を考慮にいれると、多くの政治論評に見られるように、私は政治の刷新にさほど樂觀的にはなれないのである。

汚職は悪いことに違いない。政界に汚職があつていいはずはない。それは、いかに糾弾してもしすぎるということはない。が、いつの世にもおおよそ権力に連なる政界や官界に汚職、それが顕在であろうと潜在であろうと、がなかつたためしはない。これをできるだけ少なくするためには、あらゆる手段が講ぜられなければならないが、今日の政治が汚職に対する抵抗力をもってしていることには案外気づいていない様子である。それは汚職が汚職として顕在化してくること、日々のジャーナリズムがこの

汚職を取材し、それを報道する自由と権利をもっているような今日の政治の在り方は、何よりも強い汚職に対する抗毒素である。このように取材と報道の自由が保証されている状態が、事實は起こるべき汚職を未然に防止するのに役立つのである。

国会審議のあり方とは

また国会の議事が停滞していることを、せつかちな世人やジャーナリズムはもどかしく思うのか、ひどく非難の矢を向けている。なるほど今日の国会がその全精力をあげて審議に努力しているとは思えないし、国会側に十分反省の要があることは認めなければならぬ。しかし国会が無造作に国法を改廃できる状態は決して望ましいものではないし、一會期に二百件もの法案を国会に上程する政府のこれまでのやり口も決してほめた仕儀ではない。政治の要諦は「無事であつてめでたい」であり、法案の改廃に血道をあげている政治の在り方など本来排されるべきものであると同時に、国会に提案された以上すべての法案がスムーズに議決されるような状態も、また無条件には望ましくないのである。

法律は、もともと国民の権利と義務を保護ないし規制するものであるが、その権利や義務の存在構造が猫の目のように変るようでは国民は安心して生活できない。だから法律というものはよくよくの場合以外は改廃すべきものではない。近ごろ法律の改廃で国会をゆさぶり、あるいは世間を騒がせた案件にしても、せんじつめてみれば右側通行か左側通行かのように、どちらに転んでも差支えないような側面をもっていないとは言いきれないものがある。法律の改廃は必ず国民の側における利害関係

の均衡状態に改変を加える結果になるから、現状維持派と変革派の対立も自然尖鋭化する。それには必ずプラスとマイナスの両面があり、これに伴う政治や行政の払うべき対価も勘定にいれて冷静な方程式を書き上げ、その利害得失を慎重に吟味してから立法措置に取りかからねばならない。むろんドグマに根ざした宣伝に盲従するなど、もつての外である。

わが国では、自由は放縱に通ずると思ひこみ、統制や計画を無批判に有難がる風潮が見られるが、これまたよほど用心しなければならぬ問題である。統制や計画が自由に代る神を僭称するときには許し難い罪悪で、せいぜいそれが、より公正な自由を保証するためのものでないならば、統制や計画の美名の下で人間を奴隷化することになりかねない。また統制や計画は社会の官僚化に拍車をかけ、国民的負担を増大させるのみか、統制や計画の衡立の背後には懐ろ手をして不当な権益を守ったり、貪ったりする罪悪が横行しがちなことも忘れてはならない。

私は戦時中たまたま愛読した田辺元博士の『歴史的现实』という小冊子のことを思い出す。博士はそのなかで「時間の構造」ということを説かれていた。一般に時間は過去から現在へ、現在から未来にという風に直線的に進行するように考えられているのは間違いで、時間はまさに「永遠の今」であり、その永遠の今は過去の守勢的な引力と未来に対する革新的な逆の引力の均衡状態であるという意味のことであつた。これは歴史的現実の構造そのものの明快な規定であらう。

われわれはいま否応なしに日本の現在に生きている。それ以外の生き方は空想であつて現実ではない。今日の日本は過去の重荷を背負っているが、同時に未来に対する願望も捨ててはいけぬ。未来を軽視して過去を過当に尊重することが許し難い抽象であるように、過去を捨象して未来に過当なウエイトを置くこともまた実のない空虚である。過去と未来の均衡状態に在つて、いかにして一歩でも

歴史の前進を企てるかという狭い境における実践こそが、真に歴史的な実践的な政治であり、その道具立てを地道に組立てて行くのが真に政策の名に値する政策なのではなからうか。

歴史の中に実を結ぶ実践を

今日の日本の思想や政策といわれているものの多くが空疎な抽象に墮し、歴史的具体性、ひいては実り豊かな実践性とかけ離れた乱舞を続けているように思われるのは私ひとりの繰り言ではあるまい。政治は日本の現在に対するぬきさしならない愛情に根ざしたものでなくてはならない。日本の現在をある種のドグマに立って大声叱咤することが能ではない。いわんや日本の現在を軽蔑し、国籍喪失病的言動に走ることは更に大きい罪悪である。われわれはあらためて日本のあるがままの現在に対する愛着と熱心をとりもどし、それにまつわる過去の約束と未来に対する願望をじっくりと味わいつつ次に踏み出すべき道 それがいかに困難なものであっても について模索し、実践しなければならぬのではなからうか。そしてそれが小魚を煮るような注意と愛情のこもった実践であって、はじめに日本の歴史の中で実を結ぶことになるであろう。政治に対する評論も現実政治の実践も、そのような限界を逸脱することのないように心がけたいものである。

What ㄋ How

自民党政務調査会長に就任する前後、月一回「エコノミスト」誌に連載した評論の中の一編。時代の変革がその規模と内容において、「手軽な把握を許さないようなものとなってきた」と指摘し、今日の変革論議の草分け的な意義を持つ。

いまの日本の政治にとっては、各政党の勢力の消長ということに本当の問題があるのではなく、政治そのものに対する根深い不信（それには道義的な面もあれば技術的な面もある）と、政治的無関心の無気味なひろがりとはどう対処するかが、問題の核心になっているといえよう。

われわれはまず今日の日本の政治にとって何が一番重要な課題であるか、そしていかにしてそれにアプローチするか、すなわち What と How が、このさい真剣に追及し直されなければならないことであるように思われる。それは権力の座にある政府と与党ばかりの課題ではもちろんなく、野党にとっても同様看過できない課題である。いやひとり政党ばかりでなく、広く国民的な課題でもあるといわなければならない。

今日の時代は大きい変革の時代であるといわれる。技術の革新は生産力の飛躍的な増大をもたらした。交通通信の空前の発達地球をいよいよ小さいものとし、われわれの生活空間をいよいよ大きい

ものにした。経済における消費とレジャーの比重は著しく増大し、その内容はますます多様化してきた。しかし、いふところの変化は、このような現象面にとどまらず、われわれの意識の世界にも広く深く食い込んできた。

たとえば多党化の現象である。それはひとりわが国の政界にのみ見られる現象ではなく、大きくは世界の構成（共産圏の分極化、自由圏の多極化、南北の乖離、後進圏の混迷など）そのものから、小さくはわれわれが参加する社会や家庭（労資の間ばかりでなく、新旧上下の間に見られる違和感など）の中にさえ見られる一般的な現象である。また、イデオロギーというイデオロギーは、かつての権威と光彩を失い、その支配力は著しく減退してきた。

これらのことは、要するに今日の時代の変革が、その規模において、その内容において、手輕な把握を許さないようなものとなつてき、したがつて現状をどう把握し、未来をどのように展開するかについて、われわれがまったく途方に暮れているところから生まれてきたと見るべきであろう。つまり「未来の道標」がさだかにつかめなくなり、「未来への確信」が薄れてきたところに、このような多党化の現象が芽生え、イデオロギーの後退が生まれてきたのではあるまいか。

一方、生産力の躍動の中に、巨大な経済王国がその雄姿を現わしてきて、もはや権力にとつては手に負えないものになりつつある。巨大な経済力は、権力をよそに、経済人の手によつて縦横に駆使され、組織され、優れたエリートたちは、生涯の命運を、この巨大な経済力のダイナミズムに進んで任ずることになつてきた。そしてそれは巨大な自律的なメカニズムとして成長しつつある。

生産力の躍進は、その当然の結果として、消費の増進と多様化をもたらし、労働時間の短縮を通じて、レジャーの増幅を招くことになつた。

マルクスは、生産関係における人の立場を中心に、いわゆる資本制社会の分析と展望を試み、その壮大な哲学を築いたが、いまやわれわれは消費とレジャーを中心に新しい経済社会学を打ち樹て、未来社会の展望を考えなければならなくなってきた。資本家も労働者も、この世界においては、まったく等質なものになりつつあるからである。

今日の時代の変革をとらえるには、他にもいろいろの方法や角度が考えられようが、ちょっと見たところだけでも、以上のような振幅のはげしい変革の過程にわれわれの時代はあるといえる。そうだとすれば、今日の政治が旧態依然たるものであってよい道理はない。何を主題とし、どういう方法でそれへのアプローチを試みるかという、新しい至難な課題に直面しているといわなければなるまい。

われわれの主題が、したがって過去の思想や手法を守株し、その城砦を犯すものをしりぞけることであつてよいはずのものではない。これまではどうやらそれでやつてこられたが、これからはそれではいけない。しかし、過去の思想や手法に対する郷愁から自由になることは、必ずしも容易ではない。未来への展望と確信が十分もない時代にあつては、せめて昨日まで通用してきた思想や手法に頼りたくなる心理もよくわかる。しかし、それではどうしようもない時代に、われわれはすでにはいり込んでおることは間違いない。

そうだとすれば、われわれはもつと謙虚にかつ反省的にならねばならないのではなからうか。この反省は同時に、自分と立場を異にする者に対する同情とか共感を呼ぶことになる。彼らもまた自分と同様、新しい時代の門口に立つてどうすればよいかに苦悶しているにちがいないことが理解されるからである。また、この反省は、自分の無知をしみじみかみしめることになると思う。驕慢を戒め、孤高をさけて、本当の意味における無知から出発しようといつ心情を養つていかならうかと思つた。

このことはとりわけ政治のあり方に深い省察が必要になってくる。政治は支配の原理であるという思想は、それが保守・革新いずれの衣を装っていようと、もはや牧歌的なノスタルジアにすぎなくなつた。知識と技術、政治力と経済力がこれほど普及してくると、政治は古い「支配」のステージからおりて、賢明な仲介の立場に立たなければならなくなつてきた。そして賢明な「仲介」のあり方は何かということが、本当に求められている実体ではなからうか。そういう反省がわいてくる。

アダム・スミスは、それまでの混沌を整理して、これを楽天的で壮大な体系にまとめあげ、一九世紀的な世界にその道標を与えた。マルクスは、アダム・スミスの描いた世界の分析を通して、そこに一見まったく逆なベシミズムを見てとり、その崩壊の彼方に自由の王国を見ろというこれまた楽天的な展望を示した。この二人の天才の間には、結論はちがっていたが、計画のはいりこむ余地のないオプチミズムにおいて共通性があった。

ところが、ケインズは、彼以前の経済学がもつオプチミズムと計画性の無視にあきたらず、それらはいずれも完全雇用を前提にした部分の理論であつたことを看破し、もう一度現実に立ち還つた。そして、そこにある不完全雇用の状態から再出発して、部分の理論を越えた一般の理論と政策を追究した。

私は今日の政界に求められておるものは、部分の理論や展望ではないと思う。世界はすでに小石のようにバラバラに分解された姿になっている。われわれに必要なものは現実を踏まえた一般の理論と展望であつて、ケインズ的な着眼こそが必要であるように思う。そして不完全は不完全のままでも、われわれの工夫と実践が、国民の諧調の下に一大オーケストラになるよう精進することが大切であると思う。

照 一 隅

政務調査会長として、主張やスローガンが「政策」の名において唱道される日本の現状を批判し、本当の前進のためには「具体の知識と組織化と方法論の吟味」が必要と説く。

師走の足音と共に、いわゆる予算シーズンを迎え、急に身边がせわしくなってきた。これは今年に限ったことではないが、財政がいつになく硬直化の様相を濃くしてきたし、私自身が与党の政務調査会長を引受けたので、今年の年の瀬は何となく気ぜわしい。このところ私は毎日のように多くの陳情団に攻め立てられておる。テーブルの上には、いつの間にか、陳情書と名刺の山ができて上がる。そればかりでなく、自治体、農業団体、商工団体をはじめ多くの全国組織の大会が、ちよつとこの年の瀬を期して開催される。他党の代表と仲良く並んで出席し、一場の挨拶をしなければならぬ。自分でユツクリ考えを整理したり、各方面から貴重な意見を拝聴する時間的余裕に乏しい有様である。

陳情団の言い分には、もちろん同地的な特殊な案件に関するものも少なくない。しかしその多くは、それが代表する組織体の全国的な要望である。その構想は壮大であり、その修辞は雄渾である。陳情団も心得たもので、むやみに多くの時間を取るうとはしない。要旨を伝えて簡単に引揚げる。全国大

会の会場には、大きい紙片にいくつかのスローガンが太い字で書き入れられ、舞台狭しと五月の鯉のぼりのように掲げられる。そしてそれと同工異曲の決議が採択される。それらは、政策といわんよりはむしろ主張であり、道標というべきたぐいのものだ。それらの構想は太くかつ壮大なものである。ところが、不思議にそついう主張なり道標を、どういう方法と段取りで実現にもって行くかという方法論にはほとんど触れていない。彼らにとっては、そういう方法論こそは政府与党の仕事であつて、自分たちの関知するところではないといふのであろう。ところがこの方法論こそが実は肝心であり、方法論に対する国民の理解と協力こそが、目標自体よりも大切であるといわなければならぬ。

わが国では、それにもかかわらず、それらの主張なり道標なりをそのまま政策として受取り、それらが達成できないとそれは直ちに「政策の貧困」ということで審判を受けたり、そこまでいかなくても、大きい不満の種となるのである。そしてかようなスローガンや道標は、すでに馬に食わせるほど多く用意され、いわば氾濫状況であるとさえいえる。それらが達成できないからといって、いちいち審判にかけられてはたまつたものではない。

今日の日本は、近代国家として、国民のあらゆる生活領域に曲がりなりにも各種の政策的アプローチを試みておる。それを受け止めておる国民の側には、それらの実行方法の遅速や巧拙、そのもたらす利害や得失を十分知悉しておるにちがいない。そついう具体の知識を丹念に整理組織して、それぞれの所管官庁や政党を啓蒙し、あるいは鞭撻できるはずだ。そついうことが実は壮大なスローガンの主張よりは大切である。政策的裾野の状況把握とその改善の方途こそが肝心なのである。

国民生活は、かような政策的裾野そのものである。そこにはそれぞれの政策が交錯しておる。この交錯状況の中に、それぞれの政策の優劣や緩急の度合い、さらにはコストと効果の関連が身近に感得

されておる。その生きた知識は、官庁や政党に遠慮することなく具申すべき貴重な素材である。官庁や政党もまた、かような政策的裾野の状況把握に一層の努力を傾けなければならない義務がある。

もちろん陳情や大会は、単なる儀礼や祭典ではなく、それなりに意味がある。しかしそれには多くの時間やエネルギーがいる。どれだけのコストがこのために費消されておるかわからないが、それは膨大なものになるはずである。そうだとすれば、陳情や大会の機会も、もっと活用しなければならぬ。それは壮大な構想を唱道するだけでなく、先に述べた具体の知識と組織化と方法論の吟味に、より多くのエネルギーを傾ける機会にすべきではなからうか。

政策は作文や論稿ではない。またスローガンやビジョンでもない。具体的な方法論にしっかりと裏付けられた実践の体系である。しかもその方法論は全体との関連において位置づけられていなければならない。だから政策は全体を予定し、その中で定着できるものでなければならぬ。学位の付与が、新しい方法論の案出にのみ与えられるべきものだという主張は、その意味において正しい。ここにいう定着度の測定こそが政策の正否、その生産性を決する鍵である。

また政策は、前進ばかりが美ではない。後退ないしは廃止もあり得るし、また、なければならぬ。老朽化し形骸になった政策の整理は、早ければ早いほどよい。そのために費消されてきた財源やエネルギーは、他に有効に転用しなければならぬ。

流れてやまぬ川の水がいつも清冽であるように、われわれの社会も、かような新陳代謝があつてはじめて、その健康を維持することができる。先に述べた政策的裾野の状況把握は、その意味においても、不可欠のものである。そして、陳情や大会も、それを古い退化した政策の思い切った埋葬の機縁にすることによって、一段と光彩を加えることになるであらう。

わが国では、主張やスローガンが政策の名において唱道される場合がむやみに多い。新聞や雑誌は、毎日のように数多くの献策を掲げておる。かくて日本国民の進取の精神と旺盛なエネルギーに支えられて、いわゆる「政策」の在庫はうず高く積まれてきた。ところが、その多くはしつかりした方法論の裏付けをもたないばかりに栄養失調におちいつたり、貧血をかこつておるといえる。教育においてしかり、社会保障においてしかり、公共事業においてしかり、経済政策においてまたしかりといわなければならぬ。

政策において一歩前進することは、一歩後退することと同様、容易なことではない。ところが、戦後の日本は、前進また前進を精力的に続け、後退を知らなかつた。予算は、政府の支出においても投資においても、年々歳々急ピッチの増加を記録し、中央地方を通ずる行政の機構と人員は、これまた増大を続けてきた。そしてそれは「福祉国家」というようなバラ色の理念に支えられて、あたかも当たり前のことであるかのように受取られてきた。前進は当然の道行きであり、とどまることは罪悪であるかのように思われてきた。つまり一度踏みとどまって過ぎ越し方を振りかえり、それぞれの政策の定着ぐあいを見直してみることが怠つてきたといえないだろうか。いわば日本は、しやにむに短距離的な走り方をこれまで続けてきたといえよう。

「足下を照らす」という古語がある。一隅を照らす燈が全国津々浦々に光照することが、日本にとつて一番大切なことである。それは決して後退でもなく、敗北でもない。本当の前進のためには、そのことがなされなければならない。予算の編成と、いわゆる硬直化克服の要請を控えて、そんなことをしめじみ思う今日このごろである。

会議の力学

宏池会会長時代の昭和四七年二月、再開国会の運営をめくつての感想を述べたエッセイ。国会審議の長期中断は政府の不注意と与野党の主体性の弱さのゆえと批判する。

二月再開の国会では四次防問題を巡つて与野党の楽屋裏の攻防が続き、審議が二十日近くも中断した。問題があれば、公開の審議を通して、その是非を問うのが当然の道行である。

ところが、野党側は政府に手落ちがある以上、予算案の關係部分を自ら修正して出直さない限り、審議を拒否し続けた。一方、政府側は、手続き上いささか手落ちがあつたが、それは断じて違法な措置ではないとして修正要求を拒み続けた。

そこで与党側の要請で議長が重い御輿を上げ、各党に自らの裁定案を提示し、各党とも不承不承それを受け容れて、審議は漸く再開の運びになった。本来、議会の運営には面倒な手順を履まねばならず、従つて随分、時間や忍耐を必要とするものである。それにしても今回は、いささか度が過ぎたようである。

それは、政府側の不用意な手ぬかりと、与野党夫々にニュアンスの差はあるものの主体性の弱さが

あつたからだと思つ。一寸した不注意は問題の射程の長さによつては、意外に大きい問題になりかねないものである。何事によらず注意力の弛緩はおそろしいものである。また事案に対する拒否乃至は妥協の何れの態度をとるにしても、当事者側の主体性が確立していないと必要以上に手間どるものがある。同一主体の内部での問題の理解と消化を進め、その主体の力量の評価を誤らないことが適切な処方箋に連るものではなからうか。

(昭、四七・四)